

世界

1946年1月1日創刊
2020年11月1日発行
(毎月1回1日発行)

2020 November
no.938

SEKAI 岩波書店

世界

SEKAI

2020

特集

新政権の構造と本質

一九四六年一月一日創刊
二〇二〇年一月一日発行 (毎月一回一日発行)

世界 第九三八号 二〇二〇年十一月

©岩波書店 2020年 本誌掲載記事の無断転載をお断りします。
編集・発行者 熊谷伸一郎 印刷所 凸版印刷株式会社
発行所 〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 (株) 岩波書店 本誌編集部電話 03 (5210) 4141 FAX 03 (5210) 4144

特集 新政権の構造と本質

橋本健二 菊池信輝 島 洋子 青木 理 三浦まり 猿田佐世



ジェネレーション・レフト宣言 斎藤幸平
地域自治で、グローバル資本主義を包囲する 岸本聡子
「敵基地攻撃論」の落とし穴 松井芳郎
揺れ動く中道——BLM時代のアメリカ民主党 藤永康政
ベラルーシ 抵抗の日々 サーシャ・フィリペンコ
そこで開かれた諸可能性は、二度と閉じられることはない
——追悼 D・グレーバー 酒井隆史

ジェネレーション・レフト宣言 斎藤幸平
地域自治 vs グローバル資本主義 岸本聡子
「敵基地攻撃論」の落とし穴 松井芳郎

11

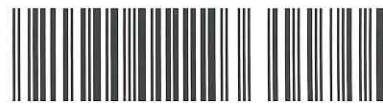
定価 (本体八五〇円十税)



HMAEN
TOKYO

hmaen.com

雑誌 05501-11
ISSN 0582-4532
Printed in Japan



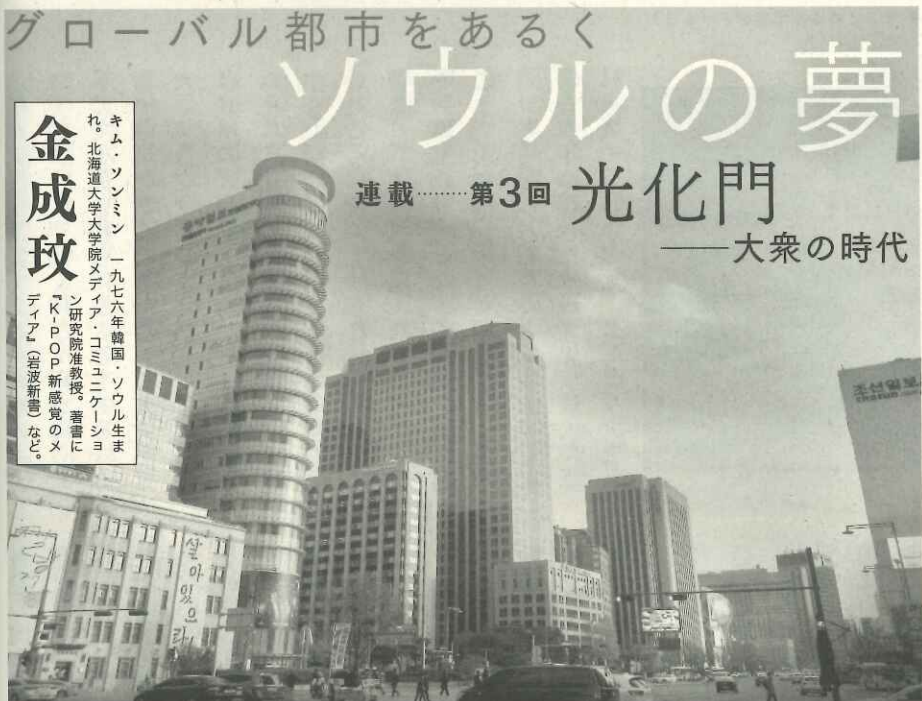
4910055011103
00850

グローバル都市をあるく ソウルの夢

連載……第3回 光化門 ——大衆の時代

金成致

キム・ソンミン 一九七六年韓国・ソウル生まれ。北海道大学大学院メディア・コミュニケーション学
ン研究科教授。著書に『K-POP 新感覚のメ
ディア』（岩波新書）など。



光化門広場からみた光化門十字路。

左の東亜日報本社から朝鮮日報の広告まで、新聞社の建物とロゴが並んでいる。(筆者撮影)

世界 SEKAI 2020.11

光化門広場

今年七月、アメリカのニューヨーク・タイムズ紙は、中国の「香港国家安全維持法」施行を受け、ニューヨーク、ロンドンと並ぶ三大拠点のひとつを香港からソウルに移転すると発表した。なぜ東京ではなく、ソウルなのか。東京には衝撃が走った。外国企業に友好的であること、報道機関が独立していること、アジアニュースの中心国であるといった理由だけでは納得がいかない人も少なくなかったようだ。

それも当然だろう。たとえばNGO「国境なき記者団」による報道自由度ランキングが示しているように、政権によってその独立性が大きく揺らぐという点で、韓国と日本はそう変わらない。二〇二〇年は四二位で、いまやアジアでもっとも高い順位にしているもの（日本は六六位）、つい四年前は前政権のもとで七〇位まで落ちた。それに、けっして報道の質が高いとも言えない。韓国は、先進国の中でも報道機関に対する信頼度が圧倒的に低い国である。

それでも、ソウルには東京にはないものがある。それをもっとも直感的に感じられる都市空間が、光化門である。地下鉄五号線光化門駅を出て、光化門交差点の周辺を眺めると、韓国という国の様々な象徴が目に入る。北側には、

左右を問わず多様だ。光化門では、大衆の声が「広場」をつくり、政治と社会を変えてきた。

しかし、ここが広場としての機能を果たすようになったのは、一九九〇年代半ばからのことだ。映画『1987』、ある闘いの「真実」が描いた「六月民主抗争」で数百万人の人びとが集まったのも、ソウル市庁前までだった。光化門エリアには入っていない。理由は単純だ。植民地時代から軍事独裁時代まで、光化門は、権力によって社会的・空間的に閉ざされていたからだ。

反日・反米、そして広場の誕生

光化門の空間が大衆に「開放」されていったのは、一九八七年以降の民主化プロセスに入ってからだった。それをもっとも象徴するのは、九五年から九六年にかけて行われた朝鮮総督府庁舎の撤去だった。

初の文民政府を名乗った金泳三政権が「歴史の立て直し」の一環として行ったその撤去は、約七割の支持を得た。「負の歴史遺産」として保存すべきだという意見もあったが、七〇年間、景福宮を背後に隠したその建物を見上げながら日常を生きてきた人びとにとっては、その風景が示す「抑圧的な権力」の象徴性のほうがはるかに大きかった。民主化の過程で大衆が求めた権力構造の解体が、都心の風

北岳山という名の山の下に一三九二年に建国した朝鮮の王宮「景福宮」とその正門「光化門」が、そのすぐ後ろには青い屋根の大統領官邸「青瓦台」がみえる。その手前にあるのは、長さ七四〇メートル・幅三四メートルの「光化門広場」。文禄・慶長の役の英雄忠武公李舜臣と、一四四六年に「ハンゲル」を創製・頒布した世宗大王の巨大な銅像の横を、多くの人びとが歩いている。

南側には、朝鮮日報社（一九二〇年創刊）と東亜日報社（一九二〇年創刊）、ソウル新聞社（一九〇四年創刊）、プレスセンターの大きな看板がみえる。そもそもこのエリアは韓国マスメディアの発祥地でもあった。初の電信（漢城電報総局）、一八八五年、初の民間新聞（『独立新聞』、一八九六年）、初のラジオ放送（京城放送局、一九二七年）、初のテレビ放送（KORCAD-TV、一九五六年）がここではじまった。韓国を代表する書店「教保文庫」の本店もここにある。

光化門からソウル市庁までの二・二キロメートルの空間には、初の近代中等教育機関「培材学堂」（一八八五年）やプロテスタント系の教会「貞洞教会」（一八九七年）など、数々の歴史・文化遺産がある。しかし、ここはたんなる観光スポットではない。ほぼ毎日のように何かを訴える人びとの姿と声が存在する。一〇〇万人を超える大規模の集会もあれば、いわば「一人デモ」もある。そのメッセージも、

景を転換させるスペクタクルとして表れたのだ。

大衆たちが自ら光化門を「広場」として完成させたのは二〇〇二年だった。六月のワールドカップにおける街頭応援が「都心に集まること」の認識を大きく変えるものだったとするならば、一月からの「SOFIA（在韓米軍地位協定）改定キャンドル集会」は、「平和的な集団闘争」を一般に定着させるものだった。とくに、女子中学生二人が米軍の装甲車（仮設架橋運搬車両）にれき殺された事件が発端で起きた「反米」の声は、米韓関係の不均衡に対する不満や怒りが表れたもので「沖繩」を勉強する人も多かった。「反米」という言葉を口にする可不敬なこととされたイデオロギー的な空気を一変させた。その年の大統領選を制したのは、その声を支持した盧武鉉氏だった。

去年の秋、私はこの連載の取材のため、光化門広場に面している米国大使館を撮影していた。「ビザ免除プログラム」(VWP)がなかった時代、移民・留学ビザ申請のために毎朝何重もの列が並んでいるすがたは、「アメリカン・ドリーム」の象徴でもあった。すると、一人の老人が私に近づいてきて、責める口調でなぜ写真を撮っているのかと問い質してきた。背中のリュックには星条旗が差し込まれていた。少し戸惑ったが、すぐに理解できた。向かい側では、老人やプロテスタント信徒が中心となっていたいわゆる

する熱望を生み出す。情報技術に基づいたニューメディアは、まさにその熱望が体現されるもう一つの広場だった。

その影響は二つの側面に現れた。一つは、言論秩序の再編。インターネットを基盤にした報道機関から、ポータルサイトの言論コミュニティ、個人のブログまで、さまざまな声が既存の伝統メディアと競争を繰り広げた。もう一つは、政治の日常化。開かれた言論空間が多様な消費者運動やアイデンティティ政治と絡み合うことで、「保守と進歩」「既成世代と若者世代」のような大まかな枠をこえた、より細かな声や、政治に影響を及ぼすようになった。

たとえば「米国産牛肉輸入再開反対」を掲げた二〇〇八年の大規模な光化門キャンドル集会。BSE（牛海綿状脳症）の危険性を危惧する消費者運動が反政府運動へと発展したその動きを主導したのは、一〇代の学生と子育てをする母たちだった。

都市空間とメディア空間両方を跨ぎながら形成された広場文化は、二〇一〇年に入るとより急速に拡張した。光化門のすがたも大きく変わった。二〇〇九年には、現在のかたちをした「光化門広場」が公開され、二〇〇六年に復元がはじまった景福宮の正門としての「光化門」も、二〇一〇年にその姿を現した。景福宮の左右にある西村と北村の伝統韓屋とともに、新たな観光スポットとして注目され

「太極旗部隊」数千人が、米韓両国の国旗を振りながら、「文在寅は共産主義者！」と叫んでいた。植民地や戦争、貧困、高度成長を生きた世代にとって、圧倒的な力の支配者／救援者から自由になるのは、そう簡単なことではない。

光化門の「広場」を取り戻す社会的・空間的転換は、「反日」や「反米」のかたちで現れた。その過程は、内側の権力構造を変えるだけでなく、それまでの「世界」との関係性を平等なものへと再設定することであった。

そういう意味で、一九六五年の日韓国交正常化後、いわゆる「親日政権」のもと、曖昧なかたちで禁止されていた日本の大衆文化に対する正式開放が、一九九八年、つまり朝鮮総督府庁舎が撤去されてからたった二年後になされたことは特記しておく必要がある。二つの出来事はけっして矛盾しておらず、むしろ民主化とグローバル化が同時に進んでいた文脈を、大衆の側面から物語っているからだ。

広場としてのメディア

光化門の「広場」がソウルの主な政治・文化的空間として定着した二〇〇〇年代は、世界でもっとも早いスピードで普及された高速インターネットとスマートフォンが、都市の生活様式を転換させた時期だった。労働と余暇、人・集団間の関係性のあり方が変わると、当然新しい政治に対してはじめてのもこの頃だった。

メディア環境はさらに劇的に変化した。「ポッドキャスト」(アップル社のPodとbroadcastの合成語)とツイッター、ユーチューブなど、次々と登場したメディア形態やプラットフォームを通じて、伝統的なマスメディアに匹敵する影響力を持った「言論空間」が築かれた。約二〇〇万人にのぼる海外の有権者たちも積極的に参加した。

モバイル・メディアが普及することで、新聞・放送の購読者数や視聴率などが急激に減少したのは世界的な潮流であるが、韓国の文脈で目立ったのは、「ジャーナリズム」の力関係だった。それまでの政治的・社会的闘争は、「朝・中・東」といわれる朝鮮日報・中央日報・東亜日報を中心とした主要メディアが設定したアジェンダ(議題)やフレーム(枠組み)のなかでなされるが多かった。この新しい言論空間のなかで試みられたのは、そのアジェンダやフレームをめぐる戦いだった。

「言論」をめぐる認識と感情をもっとも揺るがしたのは、二〇一四年に起きたセウォル号沈没事故だった。これには二段階の衝撃が存在した。第一段階として、地上波の三社を含むほぼすべての報道機関が「学生全員救助」という誤報を出し、それを信じた国民がリアルタイムで三〇四名の命が沈んでいくすがたを目撃したこと。第二段階は、政



光化門の前で行われた2016年キャンドル革命。
かつてこの場所に朝鮮総督府があった

府と保守メディアが掲げた「国益」というフレームのものと、分裂と混乱をつづけた調査過程だ。韓国の放送記者連合会は二〇一五年に『ジャーナリズムの沈没』という報告書を出し、当時の主流メディアの問題を、①事実確認の不足した書き取り式報道、②非倫理的・刺激的・扇情的報道、③権力偏向報道、④本質を希釈する報道、⑤重要な情報が漏れた報道や意味が矮小化された報道だったと指摘した。

メディアは、結局コア支持層以外の人びとの「信頼」を失う結果となった。朴槿恵政権は、「崔順実ゲート事件」と呼ばれる一連の不正で、二〇一七年三月に大統領が憲法裁判所によって弾劾されることで幕を閉じたし、急落した報道機関の信頼度は、回復するどころか、今も下落をつづけている。そして、当時の与党も、その後行われた四回の大きな全国選挙で一度も勝利していない。

ウイルスの第二波の最中に開催された八月二十五日の大規模反政府集会のニュースを通じて、日本にも伝えられている。主流メディアとSNSを跨いだメディアにおける戦いも、それと変わらない。報道とフェイクニュース、陰謀論が複雑に混ざった情報戦は、アメリカのそれに負けないほどだ。ここ数年日本のメディアを騒がせた韓国発ニュースのなかには、その後誤報として判明されるケースも少なくない。韓国の報道機関のことを、大衆の多くは商業主義に染まった権力闘争のプレイヤーとして認識している。オックスフォード大ロイター・ジャーナリズム研究所の二〇二〇年調査によれば、信頼度はわずかに二パーセントで、調査対象国のなかで四年連続最下位だった（日本は三七パーセント）。

「セウォル号」をめぐるあらゆる動きが集約されたのも、光化門広場だった。二〇一四年から二〇一九年の間、光化門を歩いたことがある人なら、光化門広場の手前に設置されていた黄色いテントを見たことがあるだろう。その姿は、人びとの世界観と情緒の変化を表す韓国社会のランドマークでもあった。断食闘争をする遺族を、その横でピザとチキンと食べながら揶揄したネットウヨの姿も含めて。じっさい、真相究明を求める声を敵対視した政府と主流メディアの対立構造を越えるものだった。今から振り返ると、あの小さな黄色いテントが象徴したのは、数十年間維持されてきた巨大な権力構造の解体だったと言っても過言ではない。



セウォル号事件の真相究明を求める人々が集った黄色いテント

「セウォル号」をめぐると呼ぶか、「メルティング・ポット」と呼ぶかは、人によって違ってくるだろう。重要なのは、そのような対立と闘争が、都市空間とメディア空間の両方を通じて常に可視化されているということだ。結局は「数」で勝敗が決まってしまうという不安を秘めた民主主義のシステムは、その数に至るまでのプロセスが大衆の目にみえなくなった瞬間、崩壊してしまう。光化門の広場は、韓国社会の激しい分裂がシステムの崩壊に至らないようにする「アゴラ」のような役割を果たしているのだ。「キャンドル革命」に対して、欧米メディアが「健康な市民社会が作動する民主主義の証拠」として評価したのも、そのような文脈から理解することができるだろう。

カオスカメルティング・ポットか

二〇一六年二月三日、一七〇万人が集まったとされる光化門の「広場」を眺めながら、私はその「キャンドル革命」が、光化門の全てを象徴していると思った。しかし違っていた。二〇一七年の大統領選挙で政権が代わると、今度は野党と高齢者、キリスト教などの一部の勢力が中心となった「太極旗部隊」が、光化門の風景を一変させた。「極右」と規定されるこの集団の存在については、新型コロナ

のなかで四年連続最下位だった（日本は三七パーセント）。いままで「革新派」として括られてきた人びとも、またさまざまな方向へと分裂している。ジェンダー、階層、世代などの集団的アイデンティティはさらに細分化され、そのあいだの妥協のない闘争が加速化している。

韓国で新型コロナウイルスが流行しはじめた三〇四月、多くの大衆が信頼したのは、パンデミックを政権批判に利用しようとした国内の報道機関ではなく、直接取材した情報に基づいて評価したBBCをはじめとする海外メディアの報道と、自ら収集した世界各地の情報だった。長年の闘争を通じて構築された大衆の「広場」では、メディアの「権威」は、国籍や看板で決まるものではない。ニューヨーク・タイムズが求めたのも、社会の動きと情報が可視化され、凝り固まった権威にこだわらずグローバルに交通する都市空間だったのではないだろうか。